法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

治癒としての『死の棘』

安積，和史 / アサカ，カズヒト / ASAKA, Kazuhito

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
66
(開始ページ / Start Page)
73
(終了ページ / End Page)
82
(発行年 / Year)
2002-07-13
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020227

治癒としての『死の棘』

安積和史

一章、「治癒」

島尾敏雄の『死の棘』（昭和三十五年四月～五十一年十月）は、昭和二十九年十月から翌三十年までの九ヶ月の実生活での夫婦の争いを、十七年もの歳月をかけて追体験し、そして作品化された。本来ならば夫婦間の秘密にしておきたいであろう「自分たちの恥ずべき事件」を、十七年もの歳月をかけて作品として書き、また公表したのはなぜだろうか。

なぜ島尾は『死の棘』を書いたのだろう。

いきなり結論から言ってしまえば、妻・ミホの病を治癒するために書いたのである。島尾は『死の棘』以前に発表した夫婦を描いた作品、いわゆる病妻ものと呼ばれている作品が、意外にも妻の病を治癒していることに気付いた。ここで意外にもというのは、ミホ夫人が「自分は病気になったけれども、そのことであなたが書きたい小説を書かないことがあるのはいやだ」（『夢と現実―六日間の対話―』）と言い、そんな妻の促しによって当初島尾は病妻ものを書き始めた。その時点では作品を書くことが妻の治癒に繋がるとは想像することが出来なかったかもしれない。しかし意外にも妻は治癒していったのだ。『死の棘』のどこにその力があったかを考えていくがこの論文の大きなテーマであるが、この点については作品を具体的に読み解いてから触れることにする。島尾は妻との生活の中で妻が次第に治癒していくのを肌で感じ、文章に「一種の治癒能力」[注1]があることを知り、「わたしは妻のこころをなぐさめることができるなら、どんな文章をも書くことができる」（「妻への祈り・補遺」）という姿勢で『死の棘』を書き続けていった。つまり十七年間、島尾は『死の棘』を妻に向けて、そして「治癒」することを願い書いたと言える。

しかしそれならば、なんらかの形で妻だけに伝えればいいことであり、わざわざ公表する必要はない。にもかかわらず、敢

えて「自分たちの恥ずべき事件」を公表した島尾の意図は何か。もちろん作家であるから作品を公表するのは当然だが、おそらく島尾はもう決して妻を裏切らず、今後は妻だけのために生きていくのだという決意を妻に信じてもらいたかった。しかし妻は『死の棘』のミホのように「よくうそをつく」と夫の言葉など信じようとしなかったのだろう。その決意が決して嘘でないことを妻に示すためには、島尾は自己の惨めな姿を妻だけでなく、読者という大勢の人間に対しても見せていかなければ、もう何も隠さないという姿勢が妻に伝わらなかったに違いない。また読者の中には当然浮気相手である「女」も含まれているので、「女」に対する今後の自己の姿勢の通信、警告のようにも考えられる。自分達に近づくなと。

以上の理由より『死の棘』を公表したのだ。

実際に作品を読んだミホ夫人は、そうした夫の想いを感じてか、だんだんと治癒していった。そしてほぼ治癒した後も島尾が書き続けたのは、本当に妻の病は治癒したのかという疑問が残ったからである。目の前にいる妻は治癒しているようにも思える。確かに過去の傷というものは時間と共に風化していくのかもしれない。しかし島尾はそのような見せかけの治癒を目指していたのではなく、敢えて過去の傷に触れ自らを追い詰めることで、妻の完全な治癒を目指そうとしたのではないか。

そのような島尾の姿勢は「自分の小説を生活とないまぜてゆこう」(『夢と現実』)であり、妻に寄り添い実際の生活の中で治癒を確かめ、また作品を書き続けることでさらに妻の治癒を確かめと、そうした繰り返しの日々が妻を完全な治癒へと導き、気が付けば十七年という歳月を要したに違いない。

まさに『死の棘』は、妻の治癒のための小説なのである。

以上がこの論文の前書きのつもりであるが、もしかしたら結論になってしまったかもしれない。

『死の棘』が妻の治癒を目的として書かれたということになると、島尾は絶えず妻の目を、心を意識し、妻がそれを実際に読んで心が穏やかになり、そして治癒していくように書いたはずである。まるで作者が二人いるかのような印象を受けるが、それが『死の棘』を初めとする病妻ものの特徴であるとも言える。

それでは妻の病を治癒するために、島尾は主要人物であるミホとトシオをどのように描いていったのかを考えていかなければなるまい。また、この作品のどこに妻を治癒へと導いていくほどの力があったのだろうか。「女」の描かれ方にも注意を払いながら作品世界を読み解き、その上で島尾とミホ夫人について再び考えていくことにしたい。

二章、ミホとトシオ

1 「審き」の日

ミホはなぜ「爆発」したのか——十年間の緊張の糸

作品世界が開かれた時、「事件」は既に起こっている。トシオが外泊から帰ってくると、十年間我慢をし続けてきたミホが遂に「爆発」したのである。

それでは、なぜミホは「爆発」することになったのか。その

原因として考えられるのは、間違いなく十年にも及ぶ夫の浮気である。

ミホは夫の浮気を「夫が女に近づいた当初からそのことを感づ」いており、「結婚式のその日から、あなたは悪い病気にとりつかれていた」ことから、結婚以来十年もの間、夫の浮気を知りながらもひたすらに我慢してきたことになる。たとえ彼女が我慢強い性格であったとしても、その期間は十年である。到底我慢など出来る期間ではないと思うのだが、なぜ十年もそんな夫に堪えてきたのだろうか。

そこで考えられるのは、やはり並々ならぬ夫への「愛」である。十年間放っておかれた夫に対して、「でもあたしはあなたが好きでした」とさえ言えるミホの「愛」の深さは相当なものであったに違いない。その「愛」を支えにして我慢してくることが出来たのである。

しかしその夫への「愛」も十年の間で「寂しい生活」が続きすぎたためか、「あなたへの愛を失ったとしか思えない」と何度も揺らぎ、その積み重ねによりミホの緊張の糸が切れて「爆発」、そしてあれほどの症状を呈するようになってしまったのだ。

そんなミホが夫の浮気を知った時点で問い詰めなかった理由として、次の二つが挙げられる。

まず一つは、夫を責める前に自分を責めていたからである。「私さえ死んでしまえばすべてがうまく解決するのではないか」（「家の中」）と、自分に欠点があったのかもしれないとミホは考え、さらに死を覚悟するほどまでに自分を追い詰めていったのである。

するとミホは自分を責めているばかりで、夫や「女」のことを憎んだりすることはなかったのかという疑問が自然と浮かび上がってくるが、ミホは「嫉妬や憎悪の訓練が欠落した」と、人を憎むことなく成長してきた。それが夫の浮気を知ったことにより、通常ならば「女」に対して「嫉妬」心が芽生え、「憎悪」さえも感じたはずである。しかしミホにしてみれば生まれて初めての経験であり、そうした感情などは今までに抱いたことはない。だからその気持ちが何なのか理解できずに苦しみ、彼女をさらに追い詰める結果になってしまったのだろう。

そしてもう一つの理由としては、ミホの夫に対する思いやりからなのか、自分が何かを言ってしまえば夫が目が覚めて、「女」の素性、本性を知ることになる。そしてそれと共に、十年間家庭に目を向けることのなかった自分自身の生活や態度にも気付き、夫が「じぶんに恥じて自殺」してしまうことを恐れていたからだと考えられる。ミホは夫の存在を次のように見ている。

「夫が死んだあとの生活をどんなに考えてみてもかたちにはなってはこない。それは背骨がぬきとられるほどの空しさがあった。そのくらいなら今のままがいい。今がどんなにつらくても夫が死んだあとよりはいい」（「家の中」）

ミホにとっては夫こそが彼女のすべてであり、もし夫が死ん

でしまったら、「背骨がぬきとられる」と支えを失い、ミホも生きてはいけない。だからたとえ夫が浮気をしても、生きてさえいてくれればいいのである。夫に死なれるよりは、「今がどんなにつらくても」の精神で堪え、夫を問い詰めなかったのだ。

そしてそのような状態のミホが一度「爆発」してしまえば、そう簡単に止めることが出来ない。自分を何とか抑えていた平常心という心のブレーキが破壊され、後はただただ夫を責め続けることしか知らない、まるで「尋問機械」に化してしまう。ミホだって好き好んで夫を責めているのではない。「何が何だか理解でき」ずに苦しみ、夫に対しての「ギモン」が尽きないだけなのである。そんな妻に対してトシオは、妻の病の原因は「すべて自分にある」として、妻に寄り添っていく。

トシオの十年にも及ぶ浮気が妻を追い詰めていったことは間違いない。では結婚以来、トシオはなぜ外泊の日々を重ねていたのか。

〈家の中〉と〈家の外〉―トシオの十年間

ミホを追い詰め、あれほどの症状を呈するようになった原因はトシオの浮気にあることは見てきたが、家の中にもっと関心があれば今回の「事件」は起こらなかったはずである。十年間も妻を見ようとしなかった原因を考えていくために、ここではまず作品「家の中」（昭和三十四年九月）を見ていきたい。そしてその上で、再び家の中に目を向けることになったトシオの姿勢について考えていくことにする。

「そのころ夫の心は家の外にあった」と作品は始まるが、家の中については「灰色にぬりこめられた死ぬほど退屈な場所」としか感じることが出来なかった。家の中には当然妻と幼い二人の子供がいる。すると家族との関係がどこか上手くいっていなかったから「退屈な場所」だったのかと考えられるが、そうとは思えない。「夫の外での行為はすべて知っている」妻は、外泊に、「女」の所へ行くだろう夫に対してさえ駅まで見送りに来て、「行ってらっしゃい」と言うぐらいだから、家の中が居心地が悪かったのではないようである。それならばどうして夫にとって家の中が「退屈な場所」として感じられたのであろうか。

実際は夫によっても妻の側からもはっきりとは説明されてはいないので推測となってしまうのだが、夫の機嫌を損ねないために見せていた妻の「おどおどしたすがた」は「あきあきするほど知り尽くし」ていたため、夫には何とも代わり映えがしない「退屈」な姿だった。つまり家の中全体が代わり映えせず、平凡すぎたのである。島尾は一度死と直面したものの、終戦により結局は死を免れた。戦中はそれは毎日想像を遥かに越えるほどの緊張の連続であり、一日一日を生きていくことに必死だった。それが突然の終戦により、死から解放されることとなったのである。島尾はその当時のことを「死を免れたという安堵と兵役の束縛がなくなってしまった解放感」（「うしろ向きの戦後」）が残ったと感じている。確かに「束縛」はなくなり自由を得ることが出来たかもしれないが、それと同時に彼は空虚な状態だったのだ。そして大恋愛の末に妻と結婚はしたものの、

いざ家の中を覗いてみると何もない平凡な日々。妻を確かに愛してはいるが、どこか物足りなさを感じていたのだろう。夫は「どんなささいな波紋もそれを歓迎したいと思えた」とまで考えるぐらいであるから、彼の心はいかに空虚なものであったか。だからと言って「波紋」とは、何も再び戦争が起こることを願っているわけではない。ただそうした平凡な日々こそが本当は幸せなのだと、その時点で気付けなかったのだ。夫はその空虚な心をどうにかして満たそうと、次第に家の中から家の外へ目を向けていったのである。

家の外はというと、「外の異常さの恍惚にとらわれ」ていたと、夫にとっては非常に魅力的なものとして映っていたようである。

「戦後、家父長的な家を破り、恋愛結婚し新たに家庭をもった彼ら（第三の新人）が、それぞれ家庭に異和を感じはじめ、心は家の外に向き、夫婦の間にすきま風が入りはじめた時期であった。[注2]」

当時は家庭に「異和」を感じる夫が多く、島尾のように平凡すぎる日常が「退屈」だったのだろう。島尾も家庭に「異和」を感じ家の外へ出て行った。そして「女」に出会い心が惹かれていったのである。

しかし次第に夫は家の外までも「退屈な場所」になっていき、さらに「世界は型のままで淀みきっている」とさえ言っている。もはや、というよりは初めから彼の「退屈」さは誰にも埋められなかった気がする。「退屈」さを埋めるには、夫自身が解決しなければならない。「苦悩の締め木にかけられている」状態から、自分で抜け出さなければいけないのだ。その「退屈」さを生み出したのは自分自身なのだから。

家の中から逃れようと家の外へ目を向けていった夫であるが、「女」によって一時的に空虚な心は満たされたかもしれない。けれども結局は家の外にも自分の空虚さを満たす居場所を見つけることが出来なかった。そして再び家の中に戻り、家の中にこそ自分の居場所があるのではないかと、家の中を見つめ直そうとしたのである。

しかしその時には妻の我慢の限界が近づいていた。「はなして。あたしにさわらないで」と「家の中」は終わるのだが、既に発作の前兆が見られる。自分の「退屈」さを紛らわそうとして家の外へ出て行き、夫が妻を見ようとしなかった結果、妻は病になったのである。

では家の中に目を向け始めた夫であるが、『死の棘』での「審き」の日をどのようにして受け止めていくのか。『死の棘』に戻り考えていくことにする。

『死の棘』では「事件」は既に起き、トシオの「仕事部屋」は荒らされている。これはトシオの「仕事」の否定だと考えられる。それまでのミホは夫の「仕事」を「夫の仕事部屋に誰がはいることもいやがっていた」（「家の中」）ほど絶対的なものとして考え、「仕事部屋」へは子供達はもちろん、たとえ妻であっても決して出入りすることを許されない、とても神聖なも

のとして見ていた。それが次第に夫に対しての信頼を失っていき、ミホは「仕事部屋」に出入りするようになっていった。そしてこれからは次のように見ていくと言うのである。

「あなたのきたない生活を文学的探求のつもりがきいてあきれるじゃないの。あなたの小説などどれひとつとしてにんげんの真実を描いてないじゃない」

ミホは夫の小説を「にんげんの真実を描いてない」と見なし、夫の「仕事」を「きたない生活」と考えていくのである。これはまさにトシオの「仕事」の否定を意味している。さらには「仕事」を否定すると共に、「仕事」をしているトシオの生き方さえも問いただしていると言っても過言ではあるまい。

そしてミホに自己の「仕事」を否定されたトシオであるが、「仕事」を辞めることはせず、家族のために「生活を支えてくれる仕事」をしていくのだ。ここには彼の今後の姿勢が感じられると共に、真摯な様子が窺える。たとえ妻に何を言われようとも、一家四人、路頭に迷わないためには「仕事」をしていかなければいけないのである。ただし、「仕事」を優先していくというわけではない。「妻や子どもの生活を最初に考えた上で、それを夫の仕事が補強」すると、飽くまでも家庭を優先させ「仕事」をしていくのである。さらに言えば、もはや発作に陥った妻がしなくなった子供達の世話もし、作家として、非常勤講師として「仕事」をしていく。トシオは今までの生活を改めようとしているのだ。ただ、いよいよ妻が入院となるとトシオは「仕事」を捨て、妻との生活を選び取っていく。

一方でトシオの小説を否定しているミホではあるが、実際にミホ夫人は夫の小説を読んで治癒していったのである。なぜ否定していた小説を読む気になったのだろうか。夫の浮気を知り「爆発」した時点では、確かに夫の小説を否定していた。しかしそれでも書くことをやめなかった夫、どこまでも寄り添う夫の真摯な姿を見続けたために、ミホ夫人は夫の小説を次第に認めていけたのではないか。

妻の発作に、ただただ付き合っていくトシオの姿勢を初めはじれったいと感じながらも、やがてはその常識を越えた姿勢に我々は圧倒されてしまうのである。

II　争い

ミホの「ギモン」

一度「爆発」してしまったミホは、なかなか止められない。何しろ夫の何もかもに対して「ギモン」が尽きないのである。この作品全体を覆っているミホの「ギモン」とは何なのだろうか。

「事件」が起こり、ミホが最初に夫にぶつけていった「ギモン」は、「あなたのきもちはどこにあるのかしら」と、夫に対して愛情を確認しようとしている。夫の心はあの「女」にあるに違いないとミホは考え、「あたしはあなたには不必要」とさえ言う。けれども、もしかしたら夫の心は自分に残っているかもしれないと、「あたしが好きだったのか」と問い詰めていく。

さらにミホは「女」のことを次々に聞いていく。何を贈ったのか、手紙を出してはいないのかと。このようにミホの「ギモン」の具体的な内容としては、十年間のトシオと「女」との関係についてである。ただ「女」のことについて言うと、確かに家の外でのことなのでミホにとっては知らないことが数多くあっただろう。しかしひょっとしたら「女」についてはトシオよりも知っていたのかもしれない。というのはミホは「探偵社を利用し、その連絡で尾行もし、時には自分で夫が泊まりこんでいる女の床下に夜を明かし」と、夫の行動をまるで監視し、「女」のことを調べ尽くしていたからである。「女の床下に夜を明かし」とは尋常でない感じもするのだが、ミホにしてみれば、ただ夫の行動を見守っていただけなのかもしれない。浮気の現場を押さえようとかではなく、愛するが故の行動だったのである。

ミホの「ギモン」を突き付けられたトシオであるが、「あなたのきもちはどこにあるのかしら」という突然の「ギモン」は度肝を抜くものであったのではないか。トシオは自分の気持ちというものがどこにあるか分からずに、心のすき間をどうにかして埋めようと家の中に目を向け始めていた矢先にこのような「ギモン」を突き付けられたのであるから、到底答えられるはずもない。その証拠に「空しさのなかで」「好きです」としか返事が出来ないのだから、本当にミホが好きなのかはトシオ自身も自信がないと言うべきか、分からない状態なのである。当然トシオを見続けてきたミホであるから、夫のそんなふわふわと宙に浮いたような言葉は「口先だけで」と見透かしてしまうのである。

その後のトシオは、次々と出てくるミホの「ギモン」に対して一つ一つ答えてはいくものの、「白状しないですむ過去はそのまま伏せておこう」という姿勢がどこかにある。その姿勢はミホにしてみれば、「今、毎日を支えているのは、夫がこれからは自分に偽りを示さないという期待だけだ」と言っていることから、最も許せないことなのである。けれどもトシオは「ひとつのうそを守ろうとする自分の暗い情熱」さえ持っているぐらいだから、一方では隠しごとをしたり、もう一方ではそれを暴いたりと、まるでいたちごっこのようだが、だからミホの「ギモン」は出しても出しても尽きることはないのだ。ただしトシオは悪気があって「うそを守ろう」としているのではない。何を言っても彼女が満足しないことが分かり、ただ十年間の出来事をすべて覚えていないだけなのである。それを思い出し曝け出すには時間が必要なのだ。

やがてトシオは気違いを装うことを覚えたりはするものの、それでも「私が審かれている場所は（略）妻とこどもふたりの日常をかかえこんだところだ」と、これこそがトシオの今後の姿勢である。家庭から再び逃げ出すのではなく、ミホの「ギモン」にどこまでも答え、妻との生活を自ら選んでいくのである。

ミホが突き付けていった「ギモン」により、トシオは家庭を顧みることとなった。そもそも彼女の「ギモン」とは、夫への愛を確かめるべく発せられたが、彼女が本当に知りたかったことは、〈あなたを一人の人間として信じていいのか〉というこ

とではないだろうか。それまでのミホは夫に「絶対的な信頼」を持っていた。しかし今ではそれは失われ、「死ぬほかに道はない」とさえ言うものの、でも夫を愛しているのだ。だからこそ、もう一度夫を信じていこうとして「ギモン」をぶつけていく。〈人間として信じていいのか〉とトシオにしてみれば、自分は信じられる人間なのか、何のために生きているのかと、自己の存在さえも問われているのだから、そう簡単に答えは見つからない。その答えを見つけた時、空虚な心は埋まるのかもしれない。

三章、「女」の影

まず実際に「女」が現われる場面として、トシオが行方が分からなくなった妻を探して「女」の家を訪ねていく場面がある。そこで別れ話を切り出すトシオだが、「女」に「好き？」と尋ねられると、答えに間を置くことなく「うん、すきだ」と答えるのだ。「女」と別れようとしているのにトシオがこのように返事をしたのは、前章で見たミホへの返事の仕方と共通するものがある。ミホに「あたしが好きだったのか」と問われ、すぐに「好きです」と返事をしたのと同じように、トシオは「女」のことが本当に好きではないのかもしれない。むしろトシオ自身「女」が好きなのかどうかは、分かっていなかったのだろう。「すきだ」と言ってしまってから、トシオは「自分でおどろき」を感じているぐらいだから、ただ空虚な心から「すきだ」と言ってしまったに違いない。

その後「女」はしばらくミホとトシオの前に姿を現わすことはなく、「女」が実際に姿を現わすのは第十章「日を繋けて」で、見舞い金を届けにくる場面である。それまでは「女」は姿を見せない。ただ『死の棘』全章を通して「女」の影は付きまとう。それはミホが夢の中で「女」を見たり、「女」からの電報が常に二人を取り囲んでいるからである。そして「女」の外見や特徴は描かれてはおらず、我々読者には「女」の像というものはほとんど浮かんでこない。にもかかわらず「女」の影がミホとトシオに付きまとう印象を受けるのは、ミホの「ギモン」によりトシオが日々「女」との関係について答えているからではないだろうか。「〈女〉は妻の尋問の中に封じ込められ、主人公と妻との間だけで共有される」[注3]と「妻の尋問」、つまりミホの「ギモン」が、トシオに対して「女」の存在を忘れさせないようにしているのだ。この「女」に関して、次のような指摘がある。

> 「この作品世界の成立に重要な役割を果たしている女については、この程度の現れ方で良いように私は思う。女は粒となり靄となって、この作品世界を覆っている……」[注4]

「女」はまさに「粒となり靄となって」と、「女」の姿が具体的に描かれていないのは、この作品が妻の治癒を目的として書かれたからである。島尾にしてみれば、今後隠したりはしないのだという姿勢を持ち、それを妻に示したいかもしれないが、今さら「女」についてあれこれ書くよりも、妻に寄り添ってい

く自己の姿勢を示す方が重要なことであったに違いない。ミホも夫に「女」との関係について色々と問い詰めてはいるが、彼女が本当に知りたかったことは、夫の今後の姿勢だったのではないだろうか。

その後「女」からの脅迫めいた電報により、ミホとトシオは逃げるように引っ越しまでする。しかし結局は逃げても何も変わらないことが分かると、「女」は次第に二人の間での共通の敵となり、ミホも「女」に向かっていこうとする姿勢を持ち始め、その共通の敵によって二人はやや心を通わせることが出来たと考えていいのではないだろうか。

四章、「入院まで」

ミホは作品の最後までトシオを責め続ける。トシオはミホを決して見放そうとはしない。ミホと共に二人だけで精神病棟の中で再出発をしていくのである。

このトシオの姿勢こそが、ミホが長い間待ち望んでいたものではないだろうか。トシオは家庭を顧みることなく、ミホは寂しい生活を送ってきた。しかし今後は夫は自分だけのために、「ひとまず十年間」、いや一生付き添ってくれるのである。

ミホは何もトシオに対して特別なことを望んだのではない。夫であるトシオが自分と共に生き、穏かな日常を送り、そして「家庭ノ幸福ヲ築クタメ努力」して欲しかったのだ。

トシオはというと、ミホと精神病棟に入院することに対して、「妻が精神病棟のなかで帰りを待っているんだ」と、妻の側を一時でも離れると、もう不安でどうしようもなくなる。トシオはミホと共に生きることが自分の生きる意味だと気付いたのだ。「もしかしたら新しい生活に出発できるのではないか」とトシオは最後にふと思うのだが、彼が望んだ「新しい生活」とは何も特別なものではない。ただ「ふだんの日常」を送りたかっただけなのだ。一度は「ふだんの日常」に飽き飽きして家の外へと目を向けていった。しかしミホの「ギモン」により、トシオにとっては辛い日々だったであろうが、ミホと過ごす時間こそがかけがえのないものであり、かつて家族で過ごしていた何気無い平凡な日々こそが幸せだったと気付いたのではないか。

ミホもトシオも望んだことは同じである。二人とも家族が集まって作る家庭の中で「ふだんの日常」を送りたかったのである。ただし、「その幸福は手をのばせばすぐつかめそうなのに、何かがつかえて取ることができない」と、平凡な日々送ることがいかに困難なことか、考えずにはいられない。

終章、夫婦共同の文学

島尾は妻を治癒させるために、トシオを、自分自身を惨めに、そして決して妻を見放すことなく、どこまでも妻に付き添う姿勢を示した。トシオの空虚な心は妻と共に生きるという目的を見出したことにより満たされ始めた。そう考えると、ミホによりトシオが救われたのかもしれない。一方でミホは「ギモン」にとらわれ、果てしなく夫を責め続けはするが、夫のことをこ

の上なく愛しているからのことであり、島尾はミホの夫への何よりも深い愛を存分に描いた。十年間のミホの我慢、そんな妻を放っておいたトシオの空虚な心、両者が真剣にぶつかった時、夫婦の絆とは何かを考える場が生まれたのである。

ミホ夫人は『死の棘』を読み、夫の愛を確認することが出来たために次第に心が穏やかになっていったのだろう。島尾もまた『死の棘』を書くことによって妻の愛を理解し、妻への愛を確認しながら心が満たされていったに違いない。『死の棘』は島尾とミホ夫人夫婦二人がいたからこそ書くことが出来た作品なのである。

まさに『死の棘』は夫婦共同の文学である。十七年もの歳月をかけて書いたのは確かに島尾であるが、その書くことを促し、実際に夫の作品を清書したのはミホ夫人なのだ。

ミホ夫人は夫の作品を実に四十三年間にわたり清書した。[注5] これは他の作家には見られない、島尾夫妻ならではのスタイルと言える。ミホ夫人は次のように言っている。

「私は清書で夫の仕事に関わりを持たせて貰える幸せを、充分に享受することを許されました。それは私にとっては「天が下なる幸いの妻」とも誇らしく思えました。

十七年もの歳月をかけて書き継いだ「死の棘」も二人の共同作業で全編を全うすることが出来ました。その清書の折には不思議な気安さを覚えて、つい慎しみを忘れて笑い出したり、心安だてなことを言葉にのせたりしました。[注6]」

ミホ夫人は『死の棘』を清書している際、「清書しながら発作」[注7]を起こしていた。この作品をミホ夫人が読めば、当時のことを思い出し、再び怒りを覚えたとしてもおかしくはない。しかしミホ夫人は、たとえ発作を起こすことになったとしても、それよりも「夫の仕事に関わりを持たせて貰える幸せ」の気持ちの方が大きかったのであろう。夫の作品を清書することにより、自分の知らない夫の世界のことを少しでも知ろうとしたのではないか。

妻の心を理解し、妻の病を治癒していこうと『死の棘』を書いた島尾。そしてそれを清書することにこの上もない幸福を感じ、夫と一体化しようとしたミホ夫人。『死の棘』とは、そうした島尾とミホ夫人が築き上げた夫婦共同の文学であり、二人にとっては「〈自分たちの文学〉」[注8]なのである。

注1「現代日本キリスト教文学全集」月報4（教文館）の対談、島尾敏雄・上総英郎によると、ミホ夫人は清書しながら発作を起こし、その繰り返しで発作が静まったと島尾は言っている。
注2『島尾敏雄』奥野健男（昭和52・12、泰流社）
注3『島尾敏雄論』岩谷征捷（昭和57・8、近代文芸社）
注4『死の棘』付録、吉行淳之介（昭和52・9、新潮社）
注5『島尾敏雄・ミホの世界―ワルシャワ・奄美・鹿児島』久井稔子（平成6・3、高城書房）
注6『島尾敏雄―かたりべ叢書25』島尾ミホ他（平成1・4、宮本企画）
注7「現代日本キリスト教文学全集」月報4（教文館）
注8『回想の島尾敏雄』小川国夫（昭和62・11、小沢書店）

（あさか　かずひと・二〇〇二年卒）